NEWSLETTER
SOSHOTSUJIN
No.7

# 雙松通訊

二松學舍大學

21世紀COEプログラム
「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

## 中間評価を受けて

## 国際シンポジウムの開催

## 海外拠点リーダー会議

## ポストCOEに向けて

# 目次


中間評価を受けて

1 「中間評価」を励みに更なる推進を
プログラム代表（学長）　今西 幹一

2 ＣＯＥプログラム中間評価を受けて
拠点リーダー　高山 節也

国際シンポジウムの開催

3 国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流」の開催
拠点リーダー　高山 節也

4 国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流」に参加して
ＣＯＥ研究助手　岡野 康幸

海外拠点リーダー会議

5 第2回ＣＯＥ海外拠点リーダー会議報告
事業推進担当者　白藤 禮幸

ポストCOEに向けて

6 「日本漢文」又は「日本漢学」について
COE顧問：佐藤 保

会議・調査等

7 EAJRS参加報告
8 事業推進担当者　町 泉寿郎

9 南京・上海調査報告（その1）
事業推進担当者　町 泉寿郎　　ＣＯＥ研究助手　川邉 雄大

10 国際シンポジウム「実心実学思想と国民文化の形成」の開催
事業推進担当者　小川 晴久

11 第2回シンポジウム『論語』の開催
事業推進担当者　竹下 悦子

18年度前期活動報告

12 中世日本漢文班

13 近世・近代日本漢文班

14 字書・訓詁・語法班

15
16 書誌学・目録データ班

17
18 寄贈資料一覧（平成18年7月～平成18年12月）

19 活動・会議一覧（平成18年8月～平成18年12月）
20 ●シンポジウム等開催　●現地調査
●国際会議出席等　●諸会議

21 和刻本古文真宝書影集7
編集後記

# 「中間評価」を励みに更なる推進を

プログラム代表（学長）　今西 幹一

## 中間評価を受けて

平成16年度に始まった本学COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」について、21世紀COEプログラム委員会によって、各採択拠点とともに中間評価を受け、9月末にその評価の通達を受けた。結果は「当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要とされる」17拠点の一に数えられるものであった。1ランク上にはプログラムが順調に進捗し、つまり助言無しに当初目標達成に向かっていると評価される10拠点があるが、本学COEプログラムの推進は、その中間点において、ほぼ「合格点」を与えられたものと思っている。後述する「助言」は付されているものの、他の3拠点とともに「特色ある研究活動が推進されている拠点」の実例として特に挙げられ、二松学舎については「日本漢文学の学際的・国際的研究体制の構築を目指す当拠点は、我が国の文化の理解、保存、発展、さらには発信に大きく貢献することが期待され、江戸期漢文データベースの構築等の意義深い取組みが進められている」と特記された評語を得ている。

これまでの足掛け3年に亙る本学COEプログラムの取り組みに対してどのような評価が下されるか案じていたが、上記評語を見る限り、中間評価段階での本学のプログラムの進捗度と成果は十分に評価されているものである。助言の主なる部分は、世界的拠点を目指す限り、その成果を国際的に敷衍する場合、「世界共通語」的な英語での発信の必要性を説くものである。初期の段階で本プログラムの構築、推進の上で、この点についてはどの程度視野に入っていたか詳らかにしないが、いずれかの段階で着手する必要性は想定されたものと思量している。文献資料の収集、所在の確認だけで膨大な作業、時間、労力を要し、当面そのことに集注せざるを得ない状況にあることは理解し得る。指摘の件については、体制の立て直し、補強が必要であり、場合によってはそうした作業を主たるテーマとしてポストCOEに繋げることも可能かと思われる。

その他、本学のCOEプログラムについて、委員会から〈コメント〉、〈留意事項〉、〈参考意見〉を通して貴重な助言を多々得ているが、それらについてはすでに対処・対応されているものもあり、拠点リーダーを先頭に、スタッフによってスクリーニングを経て取り込んでいって貰うべきものである。なおプログラムとは格別な連接はないと言及された漢詩コンクール、シンポジウム論語は、本学の教育研究の基幹、建学の精神に発するものであり、プログラムと同根、通底するものであるが、企画、意図とも別途になされたものである。

こうした評価は、毀誉褒貶半ばするのが通常、通例だが、今回の中間評価は、如上の意味合いから「褒」が「貶」に勝るものと受け止めている。小職は、本プログラムの責任者であり代表者の立場にあるが、その評価を慶ぶとともに、その間の高山拠点リーダーを初めCOE事務局のスタッフ、同推進委員会の各位の尽力、労に対して感謝するとともに、支援し理解をいただいた教職員各位、大学、法人の部局・部署に深甚の感謝の意を表したい。しかし、まだまだ途半ば、中間評価は折返し点ではない、先へ先へ進んでいかなくてはならない。各位の一層のご尽力、ご協力をお願いするとともに、所期するところ以上の成果を期待したい。プログラムの推進を通して二松学舎の評価も上り、見返りに研究スタッフ個々の実績もまた得られるに越したことはない。

本プログラムの収束の仕方、プログラムのその後（いわゆるポストCOE）についても推進委員会、スタッフ間の意見の交換・集約を経、学内諸機関での意見の聴取、検討を図ってゆく所存である。いよいよその時期が来ていると自覚している。

# COEプログラム中間評価を受けて

拠点リーダー　高山 節也

## 中間評価を受けて

二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」は、平成16年7月に採択された。分野は「革新的な学術分野」である。当初は、日本漢文学とは言いながら、漢字漢文文献全てを対象とする包括的な漢字文化研究を目的とする計画であったが、採択にあたっての留意事項として日本漢文学に限定することを要請された。これに基づいて、我々は本プログラムの事業内容を次の4本の柱にまとめて、活動を開始した。

1 日本漢文文献の所在調査とそのデータベースの作成

2 研究者交流のネットワークづくり

3 若手研究者と書誌的調査の専門家の養成

4 漢文教育の研究と振興

これらの事業を推進するために、我々は事業担当者と研究協力者を9つの研究班 ― 総括班・上代中古日本漢文・中世日本漢文・近世近代日本漢文・朝鮮漢文（日韓文化交流）・漢文教育・日本漢字音字書辞書（字書訓詁語法）・日中文化交流・書誌学目録データ（括弧内は2年目以降変更された班名）―に分けて、それぞれの分野での研究調査ならび資料収集等を行ってきた。これらの班活動のほか、COE客員研究員及び国内外の研究者による、特別講義・公開講演会・講習会等も積極的に行ってきた。

その結果、今回の中間評価ヒアリングまでに以下の刊行物を成果として公表した。

1論文集　日本漢文学研究　三島中洲研究

2研究書　本邦における支那学の発達　漢文文法と訓読処理

3資料集　藤原通憲資料集　日本漢文資料楽書篇雅楽資料二種　声明資料集

4目録　江戸漢学書目　江戸明治漢詩文書目

5教科書　二松漢文（基礎漢文）漢詩編　同思想編　二松漢文日本漢詩　同日本漢文

6報告書　国際シンポジウム報告書二種　公開講演会報告

7ニューズレター　雙松通訊1号～6号

さらに、日本漢文関連資料データの蓄積やその公開、国際シンポジウムの開催、国内及び海外の研究者の招聘、あるいは国内学会との連携等を行い、これらの実績・成果を携えて中間ヒアリングに臨んだ。

ヒアリングは、平成18年5月12日午前11時から30分、日本学術振興会にて実施された。当日は、拠点リーダーの高山節也および白藤禮幸・佐藤進・町泉寿郎各担当者の4名がヒアリングに臨み、活動報告のあと文科省COE委員の質問に答えた。質問の内容はおおむね、日本漢文学研究の国際化の意味、データベース作成をどう研究に生かして行くのか、漢文文化の社会へのアピール等に集中した。概して、刊行成果に対する評価が高かったのに比べて、情報発信や国際化の目的と方法等に関しては、数人の委員から厳しい質問があった。

その後はヒアリングを補う現地調査の要請もなく、9月27日に中間評価が公示された。

総括評価は、「当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。」というもので、これはランクとしては「B」に相当する。さらにコメントとして、「日本漢文学を日本学中に位置づけ、これを日本文化研究の基礎にすえようとすることや、短期間になしえた成果については高く評価する。しかし、世界的拠点としての内容の不明瞭さの解決や、データベースの国際化のより一層の推進、内外の人的コネクションの拡大や学内外の人材の取り込みなどが必要である」（要約）との意見が付された。

また特記事項として、国内外への強力な発信が要請され、具体的な参考意見として、国際的な共同研究の実施、英文雑誌の発行、一般の漢文教育のための市民講座の開設等が求められた。

これらの要請や指摘は、いずれも本学COEプログラムの問題点ともいえる点であり、早急に改善計画をまとめて実行に移すと同時に、直ちにポストCOEをも見据えた長期的計画の作成にとりかからなければならない。

我々は現在、日本漢文学研究の普及と振興のために、海外への人材派遣や海外からの研究者の受け入れ、あるいは海外における書誌専門家の養成事業の推進など、いくつかの事業を計画中であるが、それらの諸活動をさらに拡大した海外連携、あるいは訓点語学会や和漢比較文学会などの国語国文学系の学会や研究者とのより緊密な研究協力、データベースのインデックスやキーワードの英語化の推進等々、事業の枠を広げると同時に内容の一層の充実をはかって行かなければならないと考えている。

なお、今回の評価においては、革新的学術分野全28拠点のうち、Aランク10拠点、Bランク17拠点、Cランク1拠点であった。

また本プログラムは、特色ある拠点例6拠点の一つに挙げられている。

# 国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流」の開催

拠点リーダー　高山 節也

## 国際シンポジウムの開催

平成18年9月16日・17日の二日間にわたって、中国杭州市の華北飯店において、中国浙江工商大学日本文化研究所と本プログラムの共催により、国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流―日本漢文学の源流―」を開催した。開催には浙江工商大学日本文化研究所の王勇所長・王宝平副所長等のご尽力によるところが大で、延べ百名を超える参加者と五十名近い講演者・研究発表者・各国の拠点リーダー等を糾合した、熱心で充実した研究集会であったことをまず報告する。あらためて浙江工商大学日本文化研究所の関係者各位に御礼を申し上げる次第である。

日程は、以下のとおりであった。

9月15日午後杭州入りした直後、今西学長・佐藤理事長・高山拠点リーダー・五十嵐COE事務局長の4名が、浙江工商大学の胡祖光学長を表敬訪問した。

○9月16日　9:00 開会式

挨　　拶　浙江工商大学 胡祖光学長

二松学舎大学 今西幹一学長

日本国上海総領事館　鍋岡崇副領事

基調講演　佐藤進　二松学舎大学

「コロタイプロードの開拓者　小林忠治郎」

基調講演　王勇　浙江工商大学

「鑑真僧団とブックロード」

午後　1:30～　分科会

古代1　全5名発表

司会:河野貴美子　張龍妹 通訳:崔松子

総合　　全6名発表

司会:池田証寿・朱薇瓊　通訳:呉毓華

近世1　全4名発表

司会:沈慶昊・劉恒武　　通訳:李偉

近現代1　全5名発表

司会:佐藤一樹・李慶　　通訳:陸越

18:00　歓迎レセプション

○9月17日　8:30～　分科会

古代2　全5名発表

司会:吉原浩人　王鉄鈞　通訳:崔松子

中世　　全6名発表

司会:小方伴子・江静　　通訳:呉毓華

近世2　全5名発表

司会:町泉寿郎・朱薇瓊 通訳:劉恒武

近現代2　全5名発表

司会:佐藤一樹・王成　通訳:陸越

午後　1:30～　総合討論

パネラー8名　司会:石塚晴通・王勇

分科会総括　テーマの展望等

15:30　閉会式

挨　　拶　浙江工商大学　張仁寿副学長

二松学舎大学　佐藤保理事長

浙江工商大学　王宝平教授

16:30　拠点リーダー会議

18:00　懇親会

本シンポジウムの総括的展望は、総合討論において尽くされているが、石塚・王両氏の見解を総合すれば、新しいテーマの開拓や若い世代の発表が目立ったこと、研究者各自の観点ではなく、国際的観点からの研究が出たこと、ブックロードの概念の拡大と分野の多様性や研究の国際性・学際性の傾向が確実に進展したこと等が、見るべき成果としてあげられよう。今後は朝鮮・ベトナム・琉球・渤海までの地域の拡大、さらに東アジアのみに限らず世界全体への目配りが必要で、近代西洋人が漢文で著作した文献なども研究対象とすること、お茶の道・陶磁器の道などなお多様な文化交流に着目すること、かつまた他の地域でのシンポジウムの開催等、今後への期待をも含めて全体として高い評価が得られた。本シンポジウムの成功は、ブックロードというテーマ自体のもつ広がりと文化的な本質性によるもので、今後も継続するべきである等の発言もあった。また、分科会の区分を時代別としたことで多様な研究が各科会に配分される結果となったことも、成功の一因と考えられる。

今回の研究発表は、言語・文学・書誌・宗教・歴史等、分野としては多岐にわたったが、相対的に自然科学系や芸術系の発表が乏しかったこと等は、次回以降のシンポジウムの参考としたい。

# 国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流」に参加して

COE研究助手　岡野 康幸

## 国際シンポジウムの開催

本学21世紀COEプログラムは、浙江工商大学日本文化研究所との共催のもと、9月16日から9月17日までの2日間にわたり「ブックロードと文化交流」をテーマにした国際学術シンポジウムを古都杭州の西湖湖畔にある華北飯店で催され、10地区（日本・中国・台湾・韓国・越南・泰国・英国・米国・仏国・ベルギー）44人の発表者、総勢100人以上の参加とは、正直あまりの多さに期待と不安が交差しました。

前日、浙江工商大学側の担当者である水口幹記氏からシンポジウム説明会がおこなわれ、そのまま参加者全員で歓談を交えつつ、浙江料理の夕食に舌つづみ。

1日目、午前9時の開会式には、胡祖光浙江工商大学学長・今西幹一本学学長・鍋岡日本国上海総領事館副総領事、三氏の、このシンポジウムの日中文化交流における役割と両大学の更なる発展を願うという趣旨の挨拶があり、引き続き佐藤進本学教授「コロタイプロードの開拓者　小林忠治郎ー羅振玉・董康・傅増湘らの協力者としてー」、王勇浙江工商大学教授「鑑真僧団とブックロード」の二本の基調講演がおこなわれました。両先生の基調講演に参加者は熱心に聞き入っていました。

午後からは分科会ごとに会場を移し討論が始まりました。分科会は「総合分科会」「古代分科会」「中世分科会」「近世分科会」「近現代分科会」の5つであり、私は「総合分科会」にて「日本漢学における分類の問題点」と題して、『国書総目録　補訂版』（岩波書店、1989～91）に「漢学」「儒学」と分類されている書籍を、四部分類化してみると、四部分類だからこそ拾える書籍があり、また現在の『国書総目録』の分類よりも四部分類の方が日本人の漢文著作を分類するのに適していると思われるものがあること、次に「準漢籍」の定義については「準漢籍」・「和刻本」を漢籍でなく国書として扱った方がよく、むしろその方が自然ではなかろうかということ、そして日本漢学は思想、日本漢文学は文学と細分するのではなく、日本漢学ないし日本漢文学の名のもとに、一つの日本学として捉えた方がよいのではないか。といった趣旨の発表をしてきました。会場の反応として中国の研究者は日本漢学と日本漢文学を区別すべきだと主張し、欧米の研究者はむしろ日本学として捉える観点から一つにした方がよい、という対照的な意見をいただきました。

2日目、午前中は前日に引き続き分科会がおこなわれ、午後1時30分からの総合討論では、各分科会に参加した8人のパネラーによる各分科会の総括（各自発表内容に対するコメントを兼ねる）、本シンポジウムにおけるテーマの展望が述べられました。どのパネラーも異口同音に「シンポジウムの題目設定がよく、幅広い分野から人を呼び寄せられたのはよいことであり、盛況であった。」と総括していました。午後3時30分閉幕式、張仁寿浙江工商大学副学長・佐藤保本学理事長・王宝平浙江工商大学教授の挨拶がありました。特に佐藤保理事長が挨拶の中に引かれた白居易の「処処頭を廻らせば尽く恋うるに堪えたり、就中別れ難きは是れ湖辺」（西湖留別）の一句に、「その通り!」と思った人は多々いたことでしょう。

終了後18日は、終日市内観光。残暑と秋の気配を同時に肌で感じながらの観光は杭州への愛着をますます強め、西湖の船遊びは往時の文人を偲ばせるのに充分なものがありました。西湖周辺の喧噪とは対照的にひっそりとした章炳麟墓は訪ねる人もなく、金木犀の香りだけが「誰がために」と思うほどに満ちていました。

今回シンポジウムに参加して感じたことは、人的交流の重要性、すなわち、普段であれば語り合う機会の無い研究者と意見交換ができたことです。東アジア地域の研究者となら機会も多々ありましょうが、就中欧米の研究者とはそう多くあることではないように思います。今回のように研究者の交流に広がりが持てたのも、ひとえにシンポジウムのテーマ設定がよかったからに他なりません。

最後に今シンポジウム会場校たる浙江工商大学の全校挙げての人的支援に、心から甚大なる謝意を表します。

# 第2回COE海外拠点リーダー会議報告

事業推進担当者　白藤 禮幸

## 海外拠点リーダー会議

第2回の海外拠点リーダー会議は、中国杭州市において、2006年9月17日、浙江工商大学日本文化研究所との共催になる、'06国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流」の閉会式後、おなじ華北飯店6階会議室で、午後4時半から開かれた。本年の会議への海外各地の拠点リーダーとして出席されたのは、以下の諸氏である。

アメリカ　ロバート・ボーゲン　（カリフォルニア大学 教授）
ベルギー　ウィリー・ヴァンドゥワラ
（ルーヴァン・カトリック大学 教授）
中 国　王 宝平　（浙江工商大学 教授）
台 湾　張 寶三　（台湾大学　教授）
韓 国　沈 慶昊　（高麗大学校文科大学　教授）
タ イ　サオワラック・スリヤウオンパイサーン
（チュラロンコーン大学　教授）
ベトナム　グェン・ティ・オワイン　（ハンナム研究所）
イギリス　ピーター・コーニツキー
（ケンブリッジ大学　教授）

本年から、イギリスの参加を得るようになった。

今西学長の挨拶にはじまり、高山拠点リーダーからこの一年の報告があり、ついで、各国よりの報告を頂いた。

沈教授からは、「韓国における日本漢文学研究の現状」と題された資料に基づき、この一年間に開かれた日本学関係の学会の状況について報告され、日本漢文学に関する研究は、必要が認められながら実際には皆無という現状の報告があった。

張教授からは、台湾におけるこの一年間の研究動向の紹介があり、31点の日本漢文学に関する著書・論文のリストを示された。また、台湾大学人文社会研究院の東アジア文明研究の計画内容の説明があった。

オワイン先生からは、ベトナムの漢文学研究の状況についての報告があった。

スリヤウオンパイサーン教授からは、チュラロンコーン大学で、日本漢文学の教育がどのように行われているかについて、先日実施された集中講義の時間表や講義資料を基に紹介され、二松学舎大学の関与できる可能性について発言された。

コーニツキー教授からは、イギリスでの研究状況が報告され、熊沢蕃山についての研究、4万点に及ぶ日本書籍文献目録のこと、EAJS（欧州日本研究協会）の紹介があった。

ヴァンドゥワラ教授からは、「欧州における漢文学の研究」の資料によって、オランダ・フランス・イタリア・ドイツの研究者とその仕事の紹介があり、インター・ネットによって検索できた論文リストも提示された。

ボーゲン教授からは、南カリフォルニア大学・コロンビア大学・ワシントン大学での漢文教育の状況、ロサンゼルス漢文研究会の紹介、日本漢文関係の著書・学位論文などの報告があった。特に、欧米で訓読による教育が行われているという発言には、その教科書の入手などをはじめ、情報が交換された。

次の予定時間も迫っており、討議に必ずしも十分な時間を取れず、外国の拠点リーダーからの要望を承ることもできなかったが、全体的に、日本漢文学についての関心は高いとは言えない。これは日本国内の研究状態をふりかえってみても当然のことであって、今日の日本学研究において、漢文学研究がはたすであろう役割についても、十分に位置付けられ、自覚されているとは言い難い。外国での状態を憂慮するよりも、寧ろ我々日本人研究者が、日本学研究に日本漢文が占める位置について再確認を行い、その有効性を実証するような、画期的な研究成果を挙げることがまず、必要であろう。先の中間評価において、国際化に対する態度、取り組みについて疑問が呈され、英文の機関誌の刊行を助言された。しかし、実の所、その英文機関誌に盛るべき研究が切実に求められているのである。日本から世界へ発信すべき研究そのものが今、焦眉の急として必要なのではないか。

本プログラムの事業の一つに外国にある日本漢文文献の所在調査がある。そのためにはフランス・ドイツ・ロシアにもその地の拠点リーダーと成るべき人材を求める必要がある。その意味でも、海外拠点リーダー会議の一層の拡大・発展を計らなければならない。

# 「日本漢文」又は「日本漢学」について

COE顧問　佐藤 保

## ポストCOEに向けて

あらためて言うまでもなく、我々二松学舎大学が現在推進中の21世紀COEプログラムの名称は、「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」である。内容は、日本漢文及びそれを基礎とする学術文化の研究と教育、並びに日本漢文文献の情報の収集整理と公開を主たる目的とする活動の国際的な拠点の構築であるが、このプログラム名――特に「日本漢文学」――について、我々は申請準備の段階から長い時間をかけて議論を重ね、検討を繰り返してきた。このことに関しては、2005年5月に台湾大学で開かれた第4回日本漢学国際シンポジウムの基調報告（「日本漢文学研究の現状と課題」）でも報告し、2006年3月に創刊された『日本漢文学研究』の発刊詞「『日本漢文学研究』のめざすもの」にも議論の経緯をごく簡単に記しておいた。

当初、プログラム計画を立案する過程で、我々を悩ませた最大の問題は、端的に言えば、研究対象を「日本漢文学」と表現することが精確か否か、「日本漢文学」とはなにか、「日本漢学」ではどうか等々、キーワードの検討であった。あれこれ議論の末にとりあえずまとまったのが現在のプログラム名である。だが、これは必ずしも準備に当たった者の総意でもなく、また多数意見であったわけでもない。しかしながら、我々のあいだには一つの共通認識があったように思う。それは、本プログラムが対象とする「日本漢文学」は決して漢詩漢文などの文学の範疇にのみとどまるものではなく、日本学のあらゆる分野にかかわる基礎としての「日本漢文」がその実体であるという認識である。私が常々、我々の「日本漢文学」は即「日本漢文の学」と説明している（上記の発刊詞参照）ゆえんは、この認識にもとづくのである。

今回、再びこの問題を持ち出したのは、現在の21世紀COEプログラムの終了が残すところ2年余り、平成21年度には事業継続のためのグローバルCOEへの申請がひかえており、次のプログラム計画を考える時期にきていると考えたからである。現在の事業を継続するとすれば、本学は断じて「漢文」の旗印をおろすわけにはゆかない。なぜならば「漢文」の教育・研究こそ本学の看板であり、且つ社会の期待でもあるからである。そうだとすれば、我々は再び以前のキーワード問題に直面せざるをえないのである。

折しも、我々のCOE事業担当者の一人である大島晃上智大学教授から、「漢文学の在り方」（上智大学国文学科紀要第24号所収）の恵贈を受け、そこに「日本漢文学」の「二重性格」など、「日本漢文」「日本漢学」にも共通する「漢文」「漢学」の基本的な問題が縷々述べられているのを読んで、あらためてキーワード問題の重要性を思い起こす契機となった。大島論文には、神田喜一郎・倉石武四郎両氏をはじめ、「日本漢文学」又は「日本漢学」の定義や性格付けに苦辛し、それらが日本学と中国学の境界学問として本来的にもつ特異性に着目した先人の論考が多く引かれていて、きわめて興味深い。

さて本題に返って、キーワードをどう考えるか、である。上述のように、現在の「日本漢文学」が誤解を招きやすい表現であることは明々白々で、「日本漢文の学」と読み替えるのはいかにも姑息な方法である。いっそ「学」をとって「日本漢文」とした方が、日本学の基礎としての根元性、普遍性が鮮明に出るように思われる。しかしながら、これにも難点がないわけではない。なぜならば「日本漢文」は、どちらかと言えば、訓読による日本語表現法という国語学または言語学の範疇に属する用語という印象がつよく、その上に成り立っている広範な学術文化を指示する語としては弱い。もし、学術的な意味を明確にしようとするならば、「日本漢学」とすべきであろう。かつては「漢学」の語が前近代的な旧学としてのイメージをもち、あまりに思想的、儒学的な響きがつよいために、「日本漢文学」同様その内包するものがいささか狭隘であると退けたのではあるが、「日本漢文」に比べれば学術文化を示すことは明瞭である。「日本漢文」とするか、「日本漢学」を選ぶか、あるいは他の適当な言葉を探すか、それは今後、次のプログラム担当者を中心に、全学的に慎重に検討しなければならない課題である。

このことは次の問題にも関連する。COEプログラムが大学院生を主とする若手研究者の養成を大きな目的にすることは周知のとおりであるが、我々のプログラムで、「日本漢文」の基礎的な読解力――漢文力――をもち、日本学としての「日本漢学」の研究者を養成しようとするならば、大学院にそのための特化した専攻を設ける必要があるのではないだろうか。日本漢学の研究者を従来のように国文学専攻または中国学専攻で養成しているかぎり、日本漢学の専門性はいつまでも確立されないと思うからである。その場合には、「日本漢学専攻」が最も適当な名称であるように思う。

本学が真の意味で「日本漢文」「日本漢学」の教育・研究の牙城になるためには、早急に衆知を集めて慎重且つ周到に、次のプログラムの計画を練らなければならない。後悔の二の舞いは、できるだけ避けたいと思う。

# EAJRS参加報告

事業推進担当者　町 泉寿郎
研 究 協 力 者　上地 宏一

## 会議・調査等

日本資料専門家欧州協会-European Association of Japanese Resource Specialists-（略称EAJRS）の第17回年次大会が、さる9/27～31にイタリア・ヴェネツィア大学において開催された。町は昨年に続いて同会に参加し、本プログラムにおいて構築中の日本漢文資料に関する各種のデータベースについて、上地とともに報告を行った。昨年は紙幅の都合で、EAJRSにおける参加者の報告に関して、ほとんど記述できなかったので、今回はそれを中心に報告する。また会議に先立って、ローマでは資料調査と研究機関見学を実施したので、あわせて報告したい。

**EAJRSにおける報告者と報告要旨（敬称省略）**

**9/27(水)**

14.30—15.30　宮沢彰・阿蘇品治夫・斎藤朋子(国立情報学研究所)

国立情報学研究所（NII)における各種学術コンテンツ（GeNii、NACSIS）についての紹介や、欧州地域の図書館の所蔵情報のNACSISへの登録状況についての説明。また近年注目されている「機関リポジトリ」の世界各国の構築状況と、NIIがその構築のために行っている支援事業の紹介。

16.00—16.30　合庭惇・三宅郁夫(国際日本文化研究センター)

国立公文書館アジア歴史資料センター収蔵の日中関係資料（日文研に移管）の紹介。「海野文庫」（故海野一隆氏所蔵の地図資料等）の整理作業の紹介。

17.00—17.30　胡 龍子（国会図書館）

国会図書館における書誌データベースの現状、2005年に構築したデジタルアーカイブポータルとの連携実現の紹介。

17.30—18.00　Aldo TOLLINI（ヴェネツィア大学）

道元『正法眼蔵』の執筆過程とその後の本書の歴史、異本の紹介と、後世による再評価の意義についての考察。

**9/28(木)**

14.00-14.30　Antony BOUSSEMART（フランス極東学院）

ヨーロッパにおける日本研究のためのデジタル資料に関する調査報告。一般的な英文によるデジタル資料と比較して、日本語・日本関係の資料は非常に少なく、広く活用されているとはいいがたい。資料の価格、専用コンピュータを管理する人員、研究者数の少なさが一因にある。研究者が共同コンソーシアムを立ち上げ、デジタル資料閲覧の契約を結ぶような形態が望まれるという。

14.30—15.00　Anne BARCKOW（ベルリン国立図書館）

ベルリン国立図書館で運用されている東アジアデータベースの紹介。ドイツの研究機関に対して統一的に用意され、小規模機関における資料閲覧手段の貧弱さを解消するもの。

15.00—15.30　Tokiko YAMAMOTO-BAZZELL（ハワイ大学）

アメリカ合衆国におけるデジタル資料の共同利用のための団体の紹介。大小・公私さまざまな機関が、合同で小学館の「ジャパンナレッジ」の契約をした事例の紹介など。

16.00—16.30　Patricia CROSBY（ハワイ大学出版）

デジタル出版における現状と問題点の概要の報告。

16.30—17.00　黒木重昭（ネットアドバンス）

小学館の「ジャパンナレッジ」の紹介。「東洋文庫」『字通』『日本国語大辞典』など、コンテンツ拡充が進行中とのこと。

17.00—17.30　Tomoko Y. STEEN（アメリカ議会図書館、Science, Technology & Business Division）

レファレンスデスクをネットワーク上で実現する「バーチャル・レファレンス・デスク」の紹介。インターネット経由で投稿された質問に対し、Web上にある情報へのリンクを指し示すだけでなく、チャットなどでその場で回答するもの。

17.30—18.00 SUGITA Takashi & KABETO Kaoru（日経ヨーロッパ）

日経テレコン21に関する、ビジネス上の問題点の紹介。

**9/29(金)**

9.00-9.30　栗田淳子（国際交流基金）

国際交流基金の管轄である国内の図書館および海外の図書館についての紹介。特にタイ・バンコクの図書館は利用が多いとのこと。また日本文学の外国語翻訳物に関する書誌データベースの紹介があった。

9.30—10.30　ISHIMATSU Yuki（コロンビア大学東アジア図書館）

江戸期から近代にかけての地図をデジタル化し、インターネット上で公開する際に効果的に閲覧可能な機能をもったサイト事例の紹介。

11.00—11.30　門倉百合子(渋沢栄一記念財団)

国内企業のあらゆる社史を全文検索できるデータベースの紹介。既収資料の入力には、単純計算で100年程度かかる。現在も収集を継続しているが、すべてを網羅することは困難であり、他機関との連携が必要であるという。

11.30—12.00　YAMAMOTO Miyuki（リヨン第2大学）

フランス国内で提供を開始した研究資料機関リポジトリシステムの紹介。一度、登録したドキュメントに与えられるURLが永久的に固定される点に特徴があり、これによって他の論文内での引用時に不変のURLを表記することが可能であるとのこと。

12.00—12.30　松崎碩子(コレージュドフランス、日本学高等研究所)

クライトマン氏が明治期の日本で撮影した写真のコレクションについて紹介。その細部からさまざまな情報を得ることが可能であり、デジタル化の意義が高いとする。

14.00—14.30　森本英之（コロンビア大学図書館）

書誌情報の管理において、書題の変更をどのように扱うかの事例紹介。さまざまなパターンの書題の変更があるときに、アメリカの書誌情報の方式との整合性をどのようにするかについての、実務上の事例報告。

14.30—15.00　松田康代（大阪市立大学）

絵巻『熈代勝覧』の細部に書き込まれた人物や建物などから行った、江戸時代の出版文化についての考察。

15.00—15.30　西野春雄（法政大学）

複数の系統が存在する山姥の能面を通じて、廃曲「雪鬼」の本来の姿（能面および人物像）を模索する、という報告。

16.00—16.30　江上敏哲(京都大学情報学研究科図書室)

まったくの初心者を対象として「くずし字」を読む能力を集団で会得する場合に、どのような教材を用いるか、運用時の工夫点などについての報告。

16.30—17.00　Laura MORETTI（ヴェネツィア大学）

新しく発見されたマレガ神父のコレクションの概要の紹介。その遺稿や明治期の刊本・古文書など、日本文化に浸透した宣教活動を行った神父を特徴付けるコレクション。

17.00—17.30　上地宏一・町泉寿郎(二松学舎大学)

本プログラム事業の概要と、現在構築中の各種の日本漢文データベースの紹介。なお、漢字文献情報処理研究会『漢字文献情報処理研究』7号に関連記事（「二松学舎大学における日本漢文学研究の取り組み」）を発表したので、参照されたい。

17.30-18.00　Naomi YABE-MAGNUSSEN（オスロ大学）

ノルウェーの捕鯨技術が日本に導入された歴史の紹介。

**9/30(土)**

9.00—9.30　小山騰(ケンブリッジ大学図書館)

明治期の刺青文化の紹介と、在留外国人を通じてイギリスに紹介され、英国王室の王子が刺青を行った経緯などの紹介。

10.00—10.30 中村純子(国文学研究資料館)

2005年に発掘されたソグド人の古墓のニュースなど、近年明らかになってきたソグド人についての紹介と、その日本への流入の可能性に関する考察。

（各報告の正確な演題等は、EAJRSのHPを参照のこと。）

**我々の報告内容に対する反響　現在公開中のデータベース（日本漢文学目録データベース）において行っている検索上の工夫ーローマ字検索・異体字検索・編著者名における別称の同定検索・元号検索などーに対しては、一定の関心と評価が寄せられた。しかしながら、日本学研究のための閲覧可能なデジタル資料の乏しさは、在外日本学研究者に共通する認識であって、本プログラムにおいて構築中のデータベースに対しても、レファレンスを目的とした目録データベースだけでなく、本文が閲覧可能なテキストデータベース・画像データベース（紹介した中では、構築中の日本医家伝記資料『日本医譜』など）の一日も早い公開を望む声が聞かれた。先に日本学術振興会から発表された本プログラムに対する中間評価（9/28）においても、海外からアクセス可能な日本漢文データベースの構築を要望する意見があり、EAJRSの場での反応と軌を一にする評価であると受け止めている。また、海外の日本学研究機関むけに「漢文」の出張講義を行う構想に対しても、複数の参加者から高い関心が寄せられ、その早期実現を期した次第である。**

**国立ローマ図書館・ローマ日本文化会館**

ヴェネツィアでのEAJRSに先立ち、9/24～9/26にローマを訪れ、国立ローマ図書館・ローマ日本文化会館を見学した。国立ローマ図書館では、東洋コレクションのMarina Battaglini司書に事前に連絡を取り、日本関係資料を閲覧した。約2000点の蔵書は1995年に藤野幸雄氏の編纂にかかる『国立ローマ図書館江戸明治期刊行日本語図書目録』が刊行されており、江戸期の地誌や演劇関係、赤穂義士関係、明治期の文部省刊行物・教科書・翻訳書が比較的多い。日本漢文関係では、若干の作法書・辞書がある。この蔵書を収集した人物については、従来知られておらず、今後の調査が待たれる。いわゆる“ジャポニスム”から連想されるような絵入り本等の資料にとどまらない、幅広い関心のありようが看取される、特色あるコレクションであるとの印象を持った。これとは別に、日本資料とほぼ同量の漢籍があり、旧いカード目録のみができていた（多くは清版で、まれに明版を含む）。

ローマ日本文化会館では、加治以久子・Sergio Levi両司書を訪ねた。1972年10月に設立された同館は、国際交流基金の在外拠点の中でもケルン・ロンドン・ニューヨークと並んで最も長い歴史を有する。イタリア有数の日本研究文献の収蔵を誇る図書室を見学し、在欧日本関係資料の目録や、イタリアにおける日本古典教育のためのテキストなど、関係資料の収集を行った。

# 南京・上海調査報告（その1）

事業推進担当者　町 泉寿郎
ＣＯＥ研究助手　川邉 雄大

## 会議・調査等

杭州での国際シンポジウム「ブックロードと文化交流」（9/15～17）のあと、町・川邉は南京・上海で調査等を行った。

南京では、南京大学域外漢籍研究所を訪問し、上記シンポジウムに参加された張伯偉所長・金程宇講師、および岡田千穂助手（本学修士課程修了）と、夕食をはさんで長時間にわたり双方の研究状況などについて懇談した。同研究所では、日・韓・越の漢文文献を積極的に蒐集し、「域外漢籍」に関する論集・叢書を多数刊行中である。岡田助手からは、同研究所の設立趣旨・研究計画・研究所成員について寄稿していただいたので、詳細はそれに譲りたい。

また上海では、華東師範大学図書館古籍部を訪問し、今年7月に本学でご講演いただいた呉平主任を訪ね、同部所蔵の宋版『王状元集注分類東坡先生詩』や、盛宣懐蒐集の日本書籍等を閲覧した。今後、盛宣懐蔵書の全貌については、調査を進めたいと考えている。つづいて黄秀文図書館長を表敬訪問し、町は「日本収蔵漢籍について」と題して講演を行い、川邉がそれを通訳した。質疑応答では日本国内収蔵漢籍の総数・本学COEが作成した日本漢文学データベース等についての具体的な質問があった。

本調査は漢文文献に関する日中学術交流の貴重な機会となった。以下、南京大学域外漢籍研究所の概要を紹介する。

**南京大学域外漢籍研究所**（翻訳編集―岡田千穂）

●設立趣旨　中国の歴史上において、漢字文化はかつての周辺国家及び民族に多大な影響を及ぼした。現在漢字を用いて文字を書く国家や地域を「漢文化圏」と呼んでいるが、中国以外のそれに準ずる国家や地域、特に日本・朝鮮・ベトナムなどを「域外漢文化圏」と呼んでいる。域外漢文化圏の重要な要素である域外漢籍とは、域外人士が漢字を用いて政治・道徳・歴史・宗教・言語・文学・芸術などに関するものを記した著作物のことであり、中国国内ではすでに散佚してしまった文献も含んでいる。域外漢籍研究の重要性はすでに国際学術界に於いて関心を引き起こしていたものの、中国国内にはその領域に関する専門研究機関が設けられておらず、系統的に且つ持続性を持って学術研究を展開するに難しい部分があった。これらの状況を鑑みて、南京大学は2000年2月「域外漢籍研究所」を設立させ、この新興学科の発展を推進することにした。

本研究所は、中国国外の漢籍、特に日本・韓国・ベトナムに所蔵されている漢籍を中心としながら漢文化の総体研究に尽力を尽くしている。グローバル化の呼び声が日に日に高まる今日、これに対する研究は東アジアの文化建設に対して多大な意義を持ち、異なる国家・異なる民族の隔たりを学術という名の絆で取り除き、相互理解を進めている。

**●研究計画**

1、研究所機関誌:研究所は2005年から年刊誌『域外漢籍研究集刊』(中華書局、5月発行)を出版している。

2、「域外漢籍資料叢書」: 第一段階(2002年～2007年)では文学資料を中心にして編纂、出版する予定である。

出版済み書目:『稀見本宋人詩話四種』(江蘇古籍出版社、2002年版)、『全唐五代詩格彙考』(江蘇古籍出版社、2002年版)、『朝鮮時代書目叢刊』(中華書局、2004年版)、『唐宋千家聯珠詩格校証』(鳳凰出版社、2006年版)。

今後二年以内に出版予定の資料集:域外中国文学評論資料集(韓国巻)・約150万字、日本十五至十九世紀宋詩研究資料集(含む蘇軾、黄庭堅、恵洪、陸游等)・約600万字、朝鮮時代杜甫研究資料集・約60万字、日本江戸時代『世説新語』注釈集成・約50万字、日本詩文評匯編(漢文巻)・約120万字、『朝鮮辞賦大観』・約100万字。

3、「域外漢籍研究叢書」:今後三年以内に出版予定の研究書目。『清代詩話東伝之研究』、『朝鮮時代漢文学典範研究』、『古逸書回伝之研究』、『纂注杜詩沢風堂批解研究』、『朝鮮時代漢文化啓蒙教育研究』、『越南漢喃古籍的文献学研究』、『域外所蔵唐宋文献之実証性研究』、『越南漢喃文献避諱字研究』、『杜詩在韓国的伝播及影響』、『東亜漢籍交流研究法挙例』、『日本漢詩論稿』、『宋人撰述流伝麗鮮考』。

**●研究所成員**

・専任研究員:張伯偉（文学博士、南京大学域外漢籍研究所所長、南京大学中文系教授）、金程宇（文学博士、南京大学中文系講師）、卞東波（文学博士、南京大学中文系講師）。

・兼任研究員:曹虹（文学博士、南京大学古典文献研究所教授）、鞏本棟（文学博士、南京大学中文系教授）、兪士玲（文学博士、南京大学中文系助教授）、呉正嵐（文学博士、南京大学中国思想家中心助教授）、馮翠児（文学博士、南京大学域外漢籍研究所客員研究員）、蔡毅（南山大学外国語学部教授、南京大学域外漢籍研究所客員教授）。

・顧問:戸川芳郎（東京大学名誉教授）、趙忠業（韓国忠南大学校名誉教授）。

・助手:岡田千穂（文学修士）。

# 国際シンポジウム「実心実学思想と国民文化の形成」の開催

事業推進担当者　小川 晴久

## 会議・調査等

**平成18年10月14日と15日両日表記の主題で東アジア近世の実心実学に関する国際会議を開催した。二松学舎東アジア学術総合研究所、二松学舎大学21世紀COEプログラム、日本東アジア実学研究会三者の共催であった。なおこの国際会議は「第9回東アジア実学国際シンポジウム」を兼ねて開催された。**

**〈目的とその達成度〉**

今回のシンポジウムの主催者側の目的は、17世紀から19世紀までの東アジアの近世の良質の思想を実心実学と規定し、捉えようとする所にあった。東アジア世界には近代以後の実学とはちがう、もう一つの実学があり、それは広く儒学を意味したが、近代の実学とのちがいは、実心を重んずる所にあった。孔子によって基礎がすえられた儒学は修己治人の学という構造を持つが、修己（己れを治める）が実心に当り、治人（人を治める）が近代以後今日の実学に当る。だから近代以前の儒学の代名詞としての実学は実心実学（実心の要素を持ち、重んずる実学）と言えるが、主催者としての私たちは、17世紀以降19世紀までの実心実学をとくに重視するという立場を取った。16世紀末に中国にやってきたイエズス会宣教師の洗礼（地球は円いという認識、中国が世界の中心ではないという認識）を受けた実心実学こそ、21世紀以後の東アジア共通の、否世界共通の学問観のモデルになりうると考えるからである。17世紀以降の実学を重視するという立場は韓国と日本は共通である。ただ中国は10年前位から11世紀以降の朱子学から実学の時代とみるようになり、17世紀以降を特に重視しない。日本側の提起はどのように受け入れられたであろうか。結論から言えば、中国側は16世紀から17世紀初めまでの時期に注目し、陽明学者を中心に実心実学思想が台頭し、形成されたという形で、私たちの問題提起を受け止めた。韓国側は今まで17・18世紀に成立した韓国の実学を近代志向の強い実学と捉える傾向が強かったが、今回日本側の提起を受けとめ、実心の要素を重んじる側面に光を当ててくれた。

**〈論文集の出来と翻訳〉**

今回は、中国から5人、韓国から5人、日本から7人がフルペーパーを提出し、発表した。したがって準備段階で一番大変だったのは各ペーパーを他の二カ国語に訳し、三カ国語の論文集を作ることであった。ペーパーの数が多いので、主催国ですべてを他の二カ国語に訳すのは人手とお金がかかる。そこでそれぞれの発表者が自分の責任で三カ国語の訳を提出してもらうことにした。韓国、日本はそれを実行したが、中国側は中国文はフルペーパーを用意したが、他の二カ国語訳は要旨だけで送ってきた。日本語訳が要旨だけであったので、日本語版の全体の論文集にアンバランスが生じる。そこで二松学舎大の若手3人に4本、ICUの中国人の先生に1本、10日間の勝負で急遽フルペーパーを日本語に訳してもらった。これがとても大変であった。韓国から送られてきた日本語訳は、漢字が正字と当用漢字のちがいでパソコンの漢字変換がうまく行かず、別の苦労もあった。教訓としては、やはり金（翻訳謝礼）と人手はいるが、論文（原文）提出を二ヶ月前にし、主催国で全部翻訳するのがベストであるという結論であった。しかし日本語版は上記の人たちの協力で164頁の立派なフルペーパーのものが大会当日までに出来た。財政と時間上、同時通訳や通訳は使えなかったので、フルペーパーの日本語版は大会の成功に不可欠であった。論文内容もいいものが多かった。日本の源了圓論文、中国の葛栄晋論文のほか、韓国側で力作が多かった。

**〈三国教科書記述の比較〉**

東アジア三国の高校の教科書で、17世紀から19世紀の近世の思想がどのように記述されているかを、それぞれ報告してもらった。近世の自国の思想が実学思想と記述されているのは韓国だけ。しかも韓国では小学校6年生の「社会」の教科書から、その記述があり、我々を驚かせた。しかしその実学は「民の生活に役立つ実用的な学問」「民を豊かにし、国を富強にする学問」という理解であり、今日の実学概念と同じであることもわかった。中国では明清時期の思想は「反封建的色彩をもつ早期民主啓蒙思想」（人民教育出版社『中国古代史』）と規定されていた。これは物故した侯外廬氏の『中国思想通史』の規定であり、1992年に発足した中国実学研究会の影響力がまだ教科書に及んでいないことが判明し、興味深かった。日本の高校の教科書では江戸期の思想を実学（実心実学）思想ととらえる発想は皆無であった。その現実の故にこそ、今回の問題提起になったのである。

**〈社会的アピール〉**

主催者の一つ、日本東アジア実学研究会は本シンポジウムに際し、『実心実学の発見－いま甦る江戸期の思想』（論創社刊）を上梓した。東京新聞は文化欄で「実心実学の提唱」という私の一文を事後（10月24夕刊）であるが、載せてくれた。参加者は、初日114名、二日目55名であった。本学東アジア総合学術研究所の支援に特に感謝の意を表したい。

# 第2回シンポジウム『論語』の開催

事業推進担当者　竹下 悦子

## 会議・調査等

2006年11月25日、二松学舎大学・中洲記念講堂において、第二回シンポジウム『論語』が開催された。このシンポジウム開催の意図については、昨年の報告にも記載したとおりであるが、簡単にまとめると、本COEプログラムがテーマに掲げる「日本漢文学」の一つの典型として、日本における『論語』受容とその継承とを跡付けること、また漢学塾を母胎とする二松学舎にとってのアイデンティティー確立のための漢学と古典を再評価することという二点が挙げられるであろう。

昨年度の第一回の開催では、「東アジアの倫理観の源泉」をテーマとし、『論語』を始めとする中国の古典が日本の文化に対して持った影響について、各界の報告者から報告をいただいた。その後の討論では、会場からの質問に基いて報告者による討議の場を設けたが、テーマの大きさゆえに十分に議論が尽くせなかったという反省が残った。その詳細については昨年度の本誌の報告をご参照願いたい。

本年度は昨年度の反省に則り、テーマを絞り分り易いものを目指した。折しも脳の活性化ソフトや鉛筆で書く古典などの商品化された教養が大きなブームを呼んでいる現状があり、また、『論語』に関しては素読に対する興味を多々耳にする機会があったことから、今回のテーマは「素読と日本人の教養」と定めた。

素読は、意味内容の論理的理解や分析的解釈を排し、声に出して読み、ひたすら暗記するという古典的学問方法である。近代の学問方法が、分析と論理を重んじる客観性を偏重するものであったとするならば、素読は感性と記憶力を鍛える主観的な方法と言えるかもしれない。そしてそれはいま国語力の低下が叫ばれ教養教育の底上げが火急の課題となっている教育界においても、新しいそして重要な可能性を示唆するものとしてある。そこで、今回も四名の報告者に、それぞれの立場から、『論語』と、そして特に素読を中心にお話をお願いした。

まず、学術界（中国学）の立場からは本学名誉教授の戸川芳郎教授に「変化する『論語』――釈『論語』子罕篇「子罕言利与命与仁」」と題して、『論語』一篇の解釈をめぐる問題をお話いただいた。子罕篇の冒頭「子罕言利与命与仁」の一句、特に「与」の一字については、従来二通りの解釈があるが、それぞれの解釈の基くところが何処にあり、またどのような変化の跡を辿ったのかについての詳細な検証であり、『論語』というものが生き物のように変化しつつ受容された現状と、古典を解釈することの意味についての学術的な提言であった。参加者からは難しすぎたという意見も聞かれたが、昨年同様、大学主催でシンポジウムを開く以上、学術的質の高さは死守しなければならないものであると考える。

第二番目は、日本思想史の立場から、東洋大学の小池喜明教授に「『論語』と武士道」と題して、江戸期の『論語』受容についてお話しいただいた。小池氏は武士道の専家である。江戸時代の武士にとって『論語』が果たした役割が、思想的基盤である以前に、武士と庶民、あるいは言語を異にする諸藩、また社会階層の相違などを含む重層的社会構造を巧みに生き抜くための一つの「方法」としてあったことを、標準語として『論語』という視点からお話いただいた。

第三番目は、教育界の立場から、本学の緑川祐介教授に「寺子屋方式で論語を読もう」と題してお話いただいた。緑川先生からは長年の高校教育のご経験から、中高の生徒の漢文嫌いが句法や文法重視の漢文教育から起こること、それを打開するには素読や暗誦によって古典をそのまま受容することが大切であり、素読の効用は人間形成にもつながることについて、実例を挙げつつお話いただいた。

第四番目は実業界の立場から、矢崎科学技術振興記念財団理事長の尾崎護氏に「教養の素地としての漢文」と題したお話をうかがった。漢文の教養が、日本語にリズムと格調を与え、語彙や概念を豊かにするという意味で、日本人にとってはまず日本語の基礎として重要である事、そして、ご自身が実践していらっしゃるお孫さんへの素読教育についてご紹介いただいた。

各界を代表する四名の方々からのご報告の後、作家の陳舜臣氏を囲んで、座談会を行った。陳舜臣氏は中国の歴史や文学を題材とした多くの物語や漢詩集を世に問う作家であるが、その中国学の基礎は、幼い頃に祖父から受けた『論語』をはじめとする中国古典の素読であったという。氏にとってその素読の経験がどのようなものであったのか、また中国古典や『論語』へのご興味について語っていただいた。特に興味深かったことは、氏が『論語』を始め『三字経』や『詩経』などを素読する際に、それを台湾語でおこなっていたというお話である。中国においては素読は土地の言葉で読むものであったらしい。

座談には筆者竹下とともに明治大学の加藤徹助教授にもご参加いただき、素読という教育方法が、世代から世代へと温もりを伝えていく手作りの教育であったことを語っていただいた。

第二回の今回は、参加者も四百名を超え、またアンケート等に拠る限り、参加者からは好評を得ることが出来た。テーマを絞り、分りやすい報告が多かったことによるものだと思われる。ただ、開催に向けての準備に関しては、実行委員会の構成や役割分担、今後の方針などについて、今後更に明確な指針を立てることが必要であることを実行委員の一人として痛感した。本COEとの関りについても、今後議論を深めていただけるよう希望する。

# 中世日本漢文班

主　任　磯 水絵
担当者　田中 幸江
協力者　福島 和夫　新井 弘順　小川 剛生　高橋 秀城　滝沢 友子

## 平成18年度前期活動報告

昨年度、一昨年度と、研究の前段階として、且つは中間報告に向けて4冊の資料集を作成してきた本班は、本年よりそれを活用する研究段階に入り、粛々とそれを進行している。その一、二を具体的に述べれば、第一に、磯の大学院の講座は狛近真の『教訓抄』を取り上げ、院生と共に『雅楽資料集』中の索引類を駆使した注釈作業に取り組んでいる。それは古い中国の文献が散逸している現在、なかなかに困難で、遅遅とした歩みではあるが、進歩している事は間違いなく、院生たちは、その注釈をより具体的なものにするために、編者が拠り所にしたであろう興福寺楽人の著わした、所謂、春日楽書類の諸本蒐集を一方で進めている。なお、その一環として、この秋冬には春日大社周辺の実地踏査、天理図書館所蔵楽書の調査を行っている。

第二に、磯個人は中山忠親の『山槐記』に音楽資料を調査して以来、彼の能くした和琴の関係から御神楽の歴史の研究に入った。従来の研究においては、いまだ院政期以前について追及が甘く、『山槐記』現在のそれが明らかにならない。そこで、その嚆矢と目されている一千年前後に焦点を絞って漢文の貴族日記類の再調査、点検を重ねている。

また、第三に雅楽資料集・声明資料集の次号の準備に取りかかっている。前号に収めきれなかった上野学園大学日本音楽史研究所（旧称、上野学園日本音楽資料室）の雅楽・声明資料が、まだまだあるから、それも目録化しなければならない。なお、昨年度までの資料集は、文学・歴史・宗教・音楽と多方面の研究者に好意的に迎えられ、活用されているようである。また、東儀鐵笛の『楽道偉人伝』は研究の先蹤として尊重しなければならないが、いかにも古い。そこで、それを土台とした新しい楽人伝を企画し本プロジェクトの完成年度の上梓を目論んでいる。

第四に、既刊の資料集のうち『藤原通憲資料集』については、発行部数が少なかったため、配布箇所も限定されてしまい、要望がありつつも残部がないためそれに応えられない状態が続いている。それを鑑みて、改訂版刊行を視野に入れている。刊行後に外部から寄せられた批正や、さらなる研究の進展を踏まえた補訂作業を行い、研究者の利用の便に応えたい。

第五に、田中個人は声明資料のうちの講式研究、なかでも上野学園大学日本音楽史研究所蔵『鎮守講式』の注釈作業およびその研究をさらに進め、来年一月に行われる仏教文学会支部例会（於大正大学）において「近世根来寺復興期の一齣―上野学園大学日本音楽史研究所蔵『鎮守講式』をめぐって―」と題して口頭発表する予定である。『鎮守講式』は根来寺（大伝法院）鎮守三部権現讃嘆の講式文で、江戸後期に成立したものと見られる。管見の限り他の伝本は知られず、極めて貴重な資料である。寺社縁起のごとき内容であり、その成立は近世の根来寺復興と軌を一にするものと考えられる。成立の背景および内容研究によって、この史料の特徴を明確にしたい。

以上の五つの事項を柱に、さらに研究を進めていく予定である。

# 近世・近代日本漢文班

主　任　町 泉寿郎
担当者　森野 崇　大島 晃　揖斐 高　山辺 進
協力者　ロバートキャンベル　長尾 直茂　楊 佳香　清水 信子

## 平成18年度前期活動報告

**●研究会「四書註釈研究会（江戸前期の和刻漢籍・漢籍注釈の研究）」**

6月から大島晃担当者を中心に、月1回の研究会を開始した。参加者による輪読を核としつつ、適時、各人の関心に即した報告を織り交ぜている。輪読会としては、一説に林羅山の手になるとも言われる承応2年刊『四書集註抄』（本COEプログラム所蔵）所収「大学章句抄」と、清原宣賢自筆『大学聴塵』（大東急記念文庫所蔵）をテキストとして、16～17世紀における新注学の受け入れ方を具体的に検討していくことを企図している。

9月例会では佐藤進担当者（辞書訓詁語法班）が、藤原惺窩の『詩経』訓読における朱子叶韻説の導入についての報告を行った。

**●研究会「三島中洲研究会」**

月例会を継続して実施している。今年度の各報告の演題と報告者は次のとおりである。第20回（4/1）奈良正直「千葉県東総地方における村落指導者とその影響・評価-平田篤胤と大原幽学-」・岡野康幸「並木栗水研究―その伝記を中心として―」、第21回（5/27）濱野靖一郎「明治時代における「功利」の一考察」・神立春樹「那智佐伝師の漢学塾菁莪学舎、そして無逸塾-千葉県域にみる明治期の地方漢学塾・私立諸学校-」、第22回（6/10）特別講演―小野晋也「幕末維新期の巨人山田方谷に学ぶ」、第23回（7/22）中根公雄「宮城公子『幕末期の思想と習俗』所収「山田方谷の世界」を読む」・松川健二「方谷「贈東沢瀉」詩をめぐって」、第24回（9/9）平田雅利「明治末期の二松学舎周辺地域の地籍状況―明治45年地籍台帳による」・呉格「橋川時雄と『続修四庫提要』の編纂について」。

また資料収集に関する最新情報として、那智佐典（二松学舎専門学校校長）旧蔵の書籍・文書、および石川梅次郎（本学名誉教授）旧蔵の書籍等が学校法人二松学舎に相次いで寄贈された。ことに三島中洲の幕末期の詩文稿、那智佐典の戦時下の日記などの貴重な資料が含まれており、今後の研究成果が期待できる。

**●基幹研究「「儒蔵」編纂」**

北京大学を中心に編纂中の大規模な儒学典籍の叢書「儒蔵」に関しては、さきに本誌4号において「北京論壇2005」への参加報告のなかでその編纂事業の概要を述べ、同編纂委員会の責任者湯一介教授から本プログラムへの協力依頼が寄せられ、それに対して積極的な意思表示をしたことを記した。今年度は、戸川芳郎顧問、大島晃・町泉寿郎両担当者、長尾直茂協力者が、日本「儒学典籍」の選定作業を行い、前半期において「選目」原案（38種）を作成し、編纂作業に着手した。

**●基幹研究「漢学者伝記資料に関する研究」**

漢学者伝記資料データベースを構築するべく、資料を収集している。今年度は、国会図書館に所蔵する明治期の各種人名録から、漢学者・漢詩人を抽出して、約8500人に関する情報をテキストデータ化した。さらにデータを追加する一方で、原資料の画像やテキストデータが閲覧できるような展開を検討中である。

**●基幹研究「江戸漢学書目・江戸明治漢詩文書目の編纂」**

岡野康幸COE研究助手が、『江戸漢学書目』編纂の成果を、国際シンポジウム「ブックロードと文化交流」（9/15～17）において「日本漢学における分類の問題点」として報告した。

**●事例研究「漢方医書に関する文献研究」**

医家伝記資料『日本医譜』のテキストデータベース化を継続し、順次WEB公開する準備をすすめている。

曲直瀬流医学の調査研究に関して、町泉寿郎担当者が武田科学振興財団杏雨書屋における第46回特別展示会「曲直瀬道三―五百年の歴史」（5/22～27）に協力し、また国際シンポジウム「ブックロードと文化交流」（9/15～17）では「曲直瀬養安院家と朝鮮本医書」を報告した。

**●事例研究「日本近代における漢学・漢文学―幕末明治・大正昭和」**

山辺進担当者は、「江戸時代に於ける武士階層の教養形成と郷学」という視点のもとに、伊達市噴火湾文化研究所・宮城県立図書館・足利学校附属図書館等に所蔵される亘理伊達家と郷学「日就館」についての資料調査を実施した。

清水信子協力者は、大田錦城に関する研究論文「大田錦城の『大学』講義とその聞書について―伊藤忠岱書写資料を中心として―」を無窮会『東洋文化』97号に発表した。

川邉雄大COE研究助手は、明治期の真宗大谷派僧侶の海外布教活動に関する研究の一環を、国際シンポジウム「ブックロードと文化交流」（9/15～17）において「明治期の日本国内における唐本流通について―岸田吟香書簡を中心に―」として報告した。

# 字書・訓詁・語法班

主　任　佐藤 進
担当者　白藤 禮幸　谷本 玲大
協力者　大島 正二　小方 伴子

## 平成18年度前期活動報告

当班は「通迅」6号誌上で、18年度の事業計画として以下のような項目を掲げた。

(1)『類聚名義抄』既入力和訓の校正作業と例文入力。
(2)毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』データベースの作成
(3)基本漢籍テキストデータベースの作成
(4)その他
　①『日本漢文学研究』に当班からの論文を掲載すること
　②浙江工商大学における国際シンポジウムにおいて当班からも研究発表をすること。

ほかに、班員によるCOE公開講座の実施をあげておくべきであった。

まず,公開講座の実施について報告すると,大島正二班員(研究協力者)による「漢字の文化史」が実施されている。以下はその要項から転載である。
「私たちの祖先は、中国産の〈漢字〉を日本語化(音読・訓読)し、〈漢文訓読法〉という独自の読み方を創案した。この講義では三種類の字書(形・音・義〉を通して漢字の諸相を浮き彫りにし、漢字の日本語化の実相を探る)」

また佐藤進班員は「古訓読解演習」を実施している。具体的には藤原惺窩点『詩経』から着手した。以下はその要項からの転載であるが、訂正を含む。
「現行の漢文訓読法は返り点や送り仮名の標準化に大きな寄与をしたが、それだけでは実際の刊本や写本に付された訓を読みこなすことができない。そこで、藤原惺窩が訓点をほどこした「五経」を教材にし、古訓読解の演習を行いつつ、中国語学と国語学との両面かの考察を進める。(受講生は演習担当が義務)」

『類聚名義抄』の例文付きデータベース化については、Big5コード所収の漢字について、すでに『類聚名義抄』和訓データベースの一部を作成した。ただし、作業の効率と便宜のために、ここでは学研『漢和大字典』所載の『類聚名義抄』を転載する方法をとった。したがって、Big5コードにありながら学研『漢和大字典』未収の文字については入力がなされていない。当面はその追加入力を行ない、校正作業を加えることが必要である。

校正がすんだ親字と和訓の項目について、漢文の例文を入力する。入力予定の例文の材源としては、①中村宗彦編『九条本文選古訓集』、②寛文六年刊和刻本『文選』、③堀杏庵点『春秋経伝集解』、以上の三点をまず考えたい。そのうえで余裕があれば、④『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝』をとりあげたい。

毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』データベースの作成については、谷本班員が原本(谷本班員蔵本)の綴じ糸を解き、1丁ずつをA3版対応スキャナで電子画像化する計画を推進しつつあり、アルバイタを雇用して具体的な作業を進行している。

基本漢籍の書き下しテキストを全文データベース化する事業については、現在各種のOCRソフトを試用しつつ、変換効率のよいものをさがしている。ほかに、江戸刊本からの入力は、上述の惺窩点『詩経』を手作業で入力しつつある。

その他の項目にあげた国際シンポジウムにおける研究発表については佐藤進班員が「コロタイプロードの開拓者小林忠治郎ー羅振玉董康傅増湘らの協力者としてー」と題し45分間の基調講演を行なった(9/16)。元来は、漢・揚雄の方言語彙集『方言』宋刊本をコロタイプ印刷した経緯の検証からはじまった研究である。

次に、『日本漢文学研究』への投稿については、惺窩点『詩経』において、朱熹『詩経』叶韻説を日本漢字音化して導入している事実を公開講座の実施中に発見したので、それについて論文を用意した。

なお、これについては、近世・近代日本漢文班と当班と合同の研究会において素案を発表して、その席上種々のご意見を賜わり、大変参考になった。

最後に、プログラム全体の研究交流のために企画された「報告会」の第一回目に、佐藤進班員が「中国の古典学習と日本の訓読学習」と題して既刊研究報告書『漢文文法と訓読処理』の背景を報告した(7/19)。

# 書誌学・目録データ班

主　任　高山 節也
担当者　町 泉寿郎
協力者　高橋 智　真柳 誠　小曾戸 洋　上地 宏一　會谷 佳光

## 平成18年度前期活動報告

●和刻本漢籍邦人序跋集成収集状況

本班活動のうち、和刻本漢籍邦人序跋集成作成の現状について、一般漢籍経部における邦人序跋の収集状況を一覧の形で報告する。本学図書館全百点・内閣文庫四書類まで二百五十三点・慶應義塾大学斯道文庫礼類まで七十七点の三機関所蔵文献中、以下の序跋等を収集した。各項目は、題名（無題のものは単に序・跋等の仮名あり）・著者名・掲載文献名・出版事項の順で著録してある。配列は出版年代順とし、年代不明のものは末尾に置いてある。

易類

刊語　松永昌易　周易　寛文四年野田庄右衛門刊本

題周易句解首　小出立庭　直音傍訓周易句解　寛文十一年吉野屋惣兵衛刊本

跋　室田義方　啓蒙意見　元禄十年井上忠兵衛刊本

跋　杉原直養　易学啓蒙通釈　享和二年刊官版弘化三年訂出雲寺後印本

活版蘇氏易解凡例　窪木俊　蘇氏易解　文政十二年息耕堂藏版刊本

跋尾　窪木俊　同上

刊語　林信勝　周會魁校正易経大全　江戸期刊本

書類

刊語　松永昌易　書経　寛文四年野田庄右衛門刊本

跋　真祐　新鍥書経講義會編　延宝二年跋吉野屋権兵衛刊本

跋　長万年　古文尚書正文　安永五年集思堂刊本

活版砭蔡編跋　石塚尹　砭蔡編　享和二年跋遠州屋清右衛門活字印本

影鈔宋斬尚書正義序　林煌　尚書正義　弘化四年熊本文庫藏版刊本

例言　細川利和　同上

跋　杉原直養　書　嘉永四年刊本官版

跋　中沼之舜　書経　嘉永四年跋刊本

詩類

刊語　松永昌易　詩経　寛文四年野田庄右衛門刊本

刊語　井上通熙　詩経　延享四年前川六左衛門等刊本

韓詩外伝序　鳥山宗成　韓詩外伝　宝暦九年刊本

新刻韓詩外伝序　秋山儀　同上

毛詩指説序　關世美　毛詩指説　明和五年跋刊本

跋　岡元鳳　同上

刻詩緝序　林煌　詩緝　天保十五年跋姫路仁壽館刊本

詩緝跋　源忠学　同上

跋　田煥章　毛詩正文　集思堂蔵版刊本

礼類

儀礼序　周哲　儀礼　寛永十三年序刊本

儀礼跋　林信勝　同上

刊語　松永昌易　礼記　寛文四年野田庄右衛門刊本

跋　浅見安正　大戴礼記　元禄六年雁金屋庄兵衛刊本

題新定三礼図後　菊池武慎　新定三礼図　宝暦十一年前川六左衛門刊本

儀礼序 菅原在家 儀礼 宝暦十三年山田三良兵衛等刊本

刻儀礼序　河野子竜　同上

刊語　林信勝　礼記集説大全　江戸期刊本官版

跋　浅見安正　家礼　河内屋喜兵衛等後印本

同上　無刊記後印本

春秋類

左氏春秋跋　堀正意　春秋経伝集解　寛永八年跋刊本

刊語　松永昌易　春秋四伝　寛文四年野田庄右衛門刊本

新刊公穀白文序　林恕　新刊公穀白文　寛文八年荒川宗長刊本

跋　荒川宗長　同上

跋　林恕　同上

刻春秋非左　皆川愿　春秋非左　明和三年河南四郎右衛門等刊本

跋　奥田元継　音註全文春秋括例始末左氏伝句読直解　寛政五年刊岡島眞七等後印本

春秋左氏伝附註序　山本信有　左伝附注　寛政十一年西村源六刊本

跋　奥村慎猶　同上

刻春秋左伝属事序　林信言　春秋左伝属事　文化九年加賀屋弥助等修本

翻刻左繡叙　貫名苞　左繡　嘉永七年刊梅原亀七後印本

評註東萊博議序　川田剛　評註東萊博議　明治十二年吉川半七等刊本

評註東萊博議例言　阪谷素　同上

書評註東萊博議後　細川潤　同上

評註東萊博議跋　三島毅　同上

凡例十則　近藤元粹　増註春秋左氏伝校本　明治十五年山内五郎助等刊本

緒言　近藤元粹　春秋左氏伝校本附録　明治十五年岡田茂兵衛等刊本

増補春秋左氏伝校本序　南摩綱紀　明治十六年山田栄造排印本

跋　野村煥　音点春秋左伝詳節句解校本　明治十六年岡安慶介刊本

左伝経世鈔正文序　廣瀬範　左伝経世正文　明治十八年山梨学校徽典館排印本

刊語　林信勝　春秋集伝大全　吉文字屋庄右衛門後印本

孝経類

序　清原則賢　孝経　天明元年京都田中市兵衛刊本

序　清原宣條　同上

跋　赤松鴻　同上

佚存叢書序　天瀑　古文孝経　寛政十年序活字印本

佚存叢書第一帙目録識語　天瀑　同上

題古文孝経孔氏伝後　天瀑　同上

重刻古文孝経序　太宰純　孝経　文化四年崇山房小林新兵衛刊本

孝経會通序　浅川鼎　孝経會通　文化四年江戸須原屋孫七等刊本

鄭註孝経序　岡田挺之　孝経鄭註　文化十二年昌平坂学問所刊本

孝経鄭註跋　岡田挺之　同上

跋　阿正精　孝経　文政六年跋朱墨景刊本

跋　狩谷望　御註孝経　文政九年跋重刊本

活字版孝経附録翻刻古本序　闕名（山田文静）　古文孝経　天保六年跋刊本

習経学則　平松慎成　孝経　明治十年和歌山津田源兵衛刊本

九経三史序説　平松修　同上

跋　御注孝経　素門祥壽　江戸期井上慶壽景刊本

跋　苾密堯空　同上

跋　源弘賢　同上

群経総義類

跋　林信勝　五経白文　寛永五年京都安田安昌刊本

跋　鈴木温　詩経　寛文四年刊寛政三年今村八兵衛印本

合刻檀弓孟子序　仲子由基　合刻檀弓孟子　延享四年堀内忠助等刊本

書檀弓孟子批点後　山形孝孺　同上

題五経新点首　竹田定直　新点五経　天保十二年江戸和泉屋吉兵衛等修本

跋　松崎明復　新加九経字様　天保十五年跋刊本

縮刻唐石経例言　松崎明復　同上

後藤点五経序　林信敬　改正音訓五経　文久三年大阪山内五郎兵衛印本六刻

再刻五経序　佐藤坦　同上

五経句読序　東條哲　訂正音訓五経　慶應二年序刊本

再刻音訓五経引　川田興　音訓五経　明治三年大阪山内五郎助三刻本

刻音訓五経序　三谷倜　同上

校刻五経序　永坂潜　明治新刻五経　明治十三年東京前田誠之助刊本

新刻五経序　鐵峯真逸　新刻改正五経　明治十五年大阪和田巳之助刊本

自序　後藤義求　標注詳解五経　明治十五年柳川梅治郎刊本

緒言　同上

縮刻五経掲要跋　岸国華　五経掲要　明治十七年神奈川岸田吟香銅版刊本

跋　楽善堂主人　同上

五経序　土田泰　音訓標注五経　明治十八年東京後藤宗秀刊本

後藤点五経序　小永井岳　同上

四書類

皇侃論語義疏新刻序　服部元喬　論語集解義疏　寛政七年修明治中松村九兵衛等印本

大学解序　中野煥　大学解　文化四年刊本

序　古河樸　松陽講義　文政十一年須原屋茂兵衛等刊本

縮臨古本論語集解叙　石川之褧　論語　天保八年叙津有造館刊本

松陽講義跋　筱崎弼　同上

刻蘇批孟子　藤沢恒　増補蘇批孟子　明治十三年藤沢南岳刊岡島真七等後印本

四書集益序　亀谷行　四書集益　明治十八年長尾景弼等刊本

# 寄贈資料一覧

（平成18年7月～平成18年12月）

## ■報告書

| タイトル | 発行所（発行年） |
|---|---|
| 中国古籍文化研究　第4号 | 早稲田大学中国古籍文化研究所 |
| 国際ワークショップ「近代東アジアの情報-質と量」報告書 | 京都大学人文科学研究所（2005.11） |
| オープン・フォーラム「漢字文化の今　3」報告書 | 京都大学人文科学研究所（2006.2） |
| 漢字文化研究年報　第1輯 | 京都大学人文科学研究所（2006.3） |
| 漢字と文化　第8号 | 京都大学人文科学研究所（2006.6） |
| 金沢工業大学ライブラリーセンター利用案内 | 金沢工業大学ライブラリーセンター（2005.4） |
| ワールド・デジタル・ライブラリー　―その挑戦と目標― | 金沢工業大学ライブラリーセンター（2006.7） |
| 演劇の総合的研究と演劇学の確立　Number4 | 早稲田大学演劇博物館・演劇研究センター（2006.7） |
| 慶應義塾大学 21世紀COE 人文科学拠点 Centre forintegrated Research on the Mind 心の統合的研究センター- Newsletter　No.14 | 慶應義塾大学 21世紀COEプログラムCIRM心の統合的研究センター（2006.7） |
| 進化するアーカイヴ | 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター（2006.3） |
| C環流inter-action　第1号～3号 | 関西大学アジア文化交流研究センター（2005.8） |
| 「儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成ー日中における対照的研究」　研究報告集1 | 中村春作(2006.3) |
| 課題としての「訓読」ー異文化理解と日本伝統文化の形成ー | 中村春作(2006.7 ) |
| 中国書画名品展Ⅵ | 澄懐堂美術館（2006.9） |
| 東北大学所蔵豊後佐伯藩『以呂波分書目』の研究　第9号 | 東北大学東北アジア研究センター（2003.3） |
| シンポジウム　東アジアの出版と地域文化 | 東北大学東北アジア研究センター(2006.8) |
| 第1回　東アジア出版文化に関する国際学術会議 | 「東アジア出版文化の研究」総括班（2001.12）〔東北大学東北アジア研究センター〕 |
| 国宝「史記」から漱石原稿まで | 第15回仙台国際シンポジウム実行委員会文部科学省特定領域研究「東アジア出版文化の研究」総括班（2003.10） |
| ナオ・デ・ラ・チーナ Nao de la China　第1号～8号 | 東北大学東北アジア研究センター内特定領域研究(A)事務局 |
| 国士舘大学　漢学紀要 創刊号～7号 | 国士舘大学漢学会 |
| 国東方学　第112輯 | 東方学会（2006.7） |
| Taiwan Journal of East Asian Studies Vol.2 No.1 | 台湾大学東亜文明研究中心（2004.12） |
| 台湾東亜文明研究学刊　vol.2.No2　vol.3.No1 | 国立台湾大学出版中心（2005.12）〔国立台湾大学人文社会高等研究院東亜経典与文化研究計画　寄贈〕 |
| 金城学院大学論集　第44号(国文学編　別冊) | 金城学院大学編集委員会（2002.2） |
| 典籍交流(訓読)と漢字情報　要旨集 | 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻言語情報学講座（2006.8）〔石塚晴通氏　寄贈〕 |
| 図像から読み解く東アジアの生活文化　第1班「図像資料の体系化と情報発信」公開研究会 | 神奈川大学COEプログラム（2006.6） |
| 非文字資料とはなにか～人類文化の記憶と記録～　第1回国際シンポジウム | 神奈川大学COEプログラム（2006.6） |
| 非文字資料研究　No.12　No.13 | 神奈川大学COEプログラム[人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議（2006.9） |
| 図像・民具・景観　非文字資料から人類文化を読み解く | 神奈川大学21世紀COEプログラム　第2回　国際シンポジウム(2006.10) |
| 法政大学　国際日本学研究　第1号　第2号 | 法政大学交際日本学研究センター（2006.3） |
| 法政大学　ドイツ圏における日本研究の現状 | 法政大学交際日本学研究センター（2006.6） |
| The Newsletter HOSEI I.J.S.　No.4 | 法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究センター（2006.9） |
| 古代日本の言語文化　vol.7 | 奈良女子大学21世紀COEプログラム　古代日本形成の特質解明の研究教育拠点（2006.4） |
| 若手研究者支援プログラム(1)　vol.8 | 奈良女子大学21世紀COEプログラム　古代日本形成の特質解明の研究教育拠点（2006.4） |
| 奈良と古代　No.7　No.8 | 奈良女子大学21世紀COEプログラムNewsLetter編集委員会（2006.9） |
| KYOSEI（共生）ーNEWSLETTERー　vol.1 | 東洋大学共生思想センター（2006.9） |
| "共生思想の可能性を探る"　発表要旨集　東洋大学共生思想センター第1回公開シンポジウム | 東洋大学共生思想センター事務局(2006.12) |

## ■目録

| タイトル | 発行所（発行年） |
|---|---|
| ナオ・デ・ラ・チーナ Nao de la China　第1号 | 東北大学東北アジア研究センター内特定領域研究(A)事務局（2000.10） |
| 日本全国書誌 No.2590 | 独立行政法人国立印刷局（2006.8） |
| 四国大学蔵　凌霄文庫目録 | 四国女子大学（1992.3） |
| 長崎大学附属図書館経済学部分館漢籍分類目録　熊本大学附属図書館落合文庫漢籍分類目録（漢籍所在調査報告書1） | 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター（1980.3） |
| 唐津市近代図書館　郷土史料目録 | 唐津市近代図書館（1996.3） |
| 広島大学斯波文庫漢籍目録 | 広島大学附属図書館（1999.10） |

## ■目録

| タイトル | 発行所（発行年） |
|---|---|
| 滋賀医科大学古書目録 | 滋賀医科大学附属図書館(1981.8) |
| ハーバード・燕京同志社　東方文化講座研究室旧蔵漢籍目録 | 同志社大学人文科学研究所(1991.3) |
| 玉里文庫漢籍分類目録 | 鹿児島大学附属図書館(1994.3) |
| 鹿児島大学附属図書館蔵　松本文庫目録 | 鹿児島大学附属図書館(1984.11) |
| 岩元文庫目録 | 鹿児島大学附属図書館(1968.3) |
| 美濃加治田　平井家文藝資料分類目録 (富加町文化財調査報告書 第22号) | 富加町教育委員会(2005.3) |
| CATALOGO DEILIBRI GIAPPONESI DEI PERIODI (EDO MEIJI) | ローマ国立中央図書館(1995) |
| 香月院文庫目録 | 大谷大学図書館(1970.11) |
| 圓光寺文庫目録 | 大谷大学図書館(1972.11) |
| 林山文庫目録 | 大谷大学図書館(1984.11) |
| 神田喬_博士寄贈図書目録 | 大谷大学図書館(1988.9) |
| 楠丘文庫目録 | 大谷大学図書館(1997.12) |
| 瑞蓮寺文庫目録 | 大谷大学図書館(1998.10) |
| 詞学文庫分類目録 | 立命館大学図書館(1996.3) |
| 立命館大学漢籍分類目録　上・下 | 立命館大学図書館(1986) |
| 立命館大学漢籍分類目録 | 立命館大学図書館(1986) |
| 九州産業大学図書館所蔵　孝経関係和漢書目録 | 九州産業大学国際文化学会(2003.8) |
| 久留米市民図書館所蔵和漢書目録 | 久留米市教育委員会(1983.2) |
| 杵築藩関係古文書調査報告書　地域関係書籍・漢籍・日本漢詩文目録 | 杵築市立図書館(1992.8) |
| 杵築藩関係古文書調査報告書　古文書・和書目録 | 杵築市立図書館(1992.8) |
| 立命館大学所蔵　高木正一先生旧蔵漢籍古書分類目録 | 中国藝文研究会(2000.7) |
| 龍谷大学大宮図書館　和漢古典籍分類目録　総記・言語・文学之部 | 龍谷大学図書館(1999.3) |
| 岡藩由学館典籍等目録 | 竹田市立図書館(1992.3) |
| 甲南女子大学図書館所蔵　和装本・漢籍目録 | 甲南女子大学図書館(1995.9) |
| 島根県立図書館　漢籍分類目録 | 島根県立図書館(2001.5) |
| 廟山文庫蔵書目録 | 多久市教育委員会(1994.3) |

## ■一般書籍

| タイトル | 発行所（発行年） |
|---|---|
| 申江勝景図(上・下) | 江蘇古籍出版社(2003.1)　〔呉平氏　寄贈〕 |
| 敦煌学・日本学　石塚晴通教授退職紀念論文集 | 上海辞書出版社(2005.12)　〔石塚晴通氏　寄贈〕 |
| 中国教育史(東亜文明研究叢書44) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 東西交流史的新局(東亜文明研究叢書45) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 東亜傳統家礼、教育与国法(一)(東亜文明研究叢書46) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 東亜傳統家礼、教育与国法(二)(東亜文明研究叢書47) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 中国中古的教育与学礼(東亜文明研究叢書48) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 良知学的轉折(東亜文明研究叢書49) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 東亜視域中的国籍、移民与認同(東亜文明研究叢書58) | 国立台湾大学出版中心(2005.12) |
| 韓国江華陽明学研究論集(東亜文明研究叢書50) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 儒学的気論与工夫論(東亜文明研究叢書52) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 中国文学研究的新趨向　自然、審美与比較研究(東亜文明研究叢書53) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 天礼、身体与国体　迴向世界的漢学(東亜文明研究叢書54) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 出土文献　研究方法論文集　初集(東亜文明研究叢書55) | 国立台湾大学出版中心(2005.9) |
| 儒家視野下的政治思想(東亜文明研究叢書56) | 国立台湾大学出版中心(2005.12) |
| 書物の中日交流史(浙江省中日関系史学会叢刊6) | 国際文化工房(2005.12)　〔王勇氏　寄贈〕 |
| 魏晋玄学研究論著目録　1884-2004　上冊・下冊 | 漢学研究中心(2004.11) |
| 中日実学史研究 | 中国社会科学出版社(1992.6)　〔高山節也氏　寄贈〕 |
| 渡辺崋山　郷国と世界へのまなざし(愛知大学郷土研究所ブックレット7) | 愛知大学綜合郷土研究所(2004.3)　〔高山節也氏　寄贈〕 |
| 先端研究　第4号 | 関西学院大学大学院社会学研究科(2006.9) |
| 漢字とかな | I.MAISSONNEUVE(1987) |
| 中国明代歴史文献 | 学林出版社(1999.10) |
| 問題与方法 | 南京大学出版社(2006.9) |

※ご寄贈いただき感謝申し上げます。

# 活動・会議一覧

（平成18年8月～平成18年12月）

## ●シンポジウム等開催

### ■シンポジウム等

| 開催日 | 期日 | 会場 |
|---|---|---|
| 国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流」（共催・浙江工商大学日本文化研究所） | 18.09.16～18.09.17 | 中国・杭州市 |
| 第2回COE海外拠点リーダー会議 | 18.09.17 | 中国・杭州市 |
| 国際シンポジウム「実心実学思想と国民文化の形成」（共催・東アジア学術総合研究所） | 18.10.14～18.10.15 | 本学・中洲記念講堂 |
| シンポジウム『論語』（共催・二松学舎大学） | 18.11.25 | 本学・中洲記念講堂 |

### ■公開講演会

| 開催日 | 主催等 | 講師 | 所属 | 演題 |
|---|---|---|---|---|
| 18.07.04 | COE | 呉　平 | 中国・華東師範大学 | 盛宣懐と愚斉図書館について |
| 18.09.09 | COE | 呉　格 | 中国・復旦大学 | 「橘川時雄と『続修四庫提要』の編集について |
| 18.12.07 | COE | 加藤 国安 | 愛媛大学教育学部 | 簡野道明の愛媛時代および漢文教科書 |

### ■COE研究報告会

| 開催日 | | 報告者 | 所属 | 演題 |
|---|---|---|---|---|
| 第2回 | 18.10.05 | 小川　晴久 | 事業推進担当者 | もう一種類の日本漢文教科書 |

### ■COE研究発表会

| 開催日 | | 報告者 | 所属 | 演題 |
|---|---|---|---|---|
| 第3回 | 18.10.21 | 鈴木　英之 | COE研究員 | 浄土宗における漢籍の受容と展開―了誉聖冏著作を中心に |
| | | 藤田　智章 | COE研究助手 | 漱石詩における<鳥>のイメージ |
| | | 植松　宏之 | COE研究助手 | 玉堂春故事をめぐって |

## ●現地調査

### ■国内調査等

| 氏名 | 期間 | 行き先 | 主な調査機関 |
|---|---|---|---|
| 山辺　進 | 18.08.16～18.08.17 | 仙台市 | 宮城県立図書館　他 |
| 白藤　禮幸 | 18.08.31～18.09.03 | 高知市、松山市 | 高知県立図書館、愛媛県立図書館　他 |
| 山辺　進 | 18.09.05～18.09.09 | 広島市、岡山市 | 広島大学、岡山大学　他 |
| 芹川　哲世 | 18.10.09～18.10.11 | 京都市、大阪市 | 京都大学、大阪府立中之島図書館　他 |
| 高山　節也 | 18.12.17～18.12.20 | 鳥取市、松江市 | 鳥取県立図書館、島根県立図書館　他 |
| 滝沢　友子 | 18.11.09～18.11.10 | 天理市、奈良市 | 天理大学、春日大社 |
| 磯　水絵 | 18.12.18～18.12.20 | 奈良市 | 春日大社 |

### ■海外調査

| 氏名 | 期間 | 行き先 | 主な調査機関 |
|---|---|---|---|
| 町　泉寿郎<br>川辺　雄大 | 18.09.18～18.09.21 | 中国・南京市,<br>上海市 | 南京大学、華東師範大学 |
| 芹川　哲世 | 18.09.18～18.09.25 | 韓国・ソウル市 | 崇実大学　他 |
| 小川　晴久 | 18.12.22～18.12.26 | 韓国・ソウル市 | 国立中央図書館、崇実大学　他 |

## ●国際会議出席等

| 氏　名 | 期　間 | 行き先 | 会　議　名　称 |
|---|---|---|---|
| 高山節也<br>他12名 | 18.09.14～18.09.19 | 中国・杭州市 | 国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流」 |
| 町 泉寿郎<br>上地 宏一 | 18.09.23～18.10.01 | イタリア・ベネチア | EAJRS（日本資料専門家欧州協会）総会 |

## ●諸会議

### ■推進委員会

| | |
|---|---|
| 第23回 | 18.10.04 |
| 第24回 | 18.11.08 |
| 第25回 | 18.11.29 |

### ■事業推進担当者会議

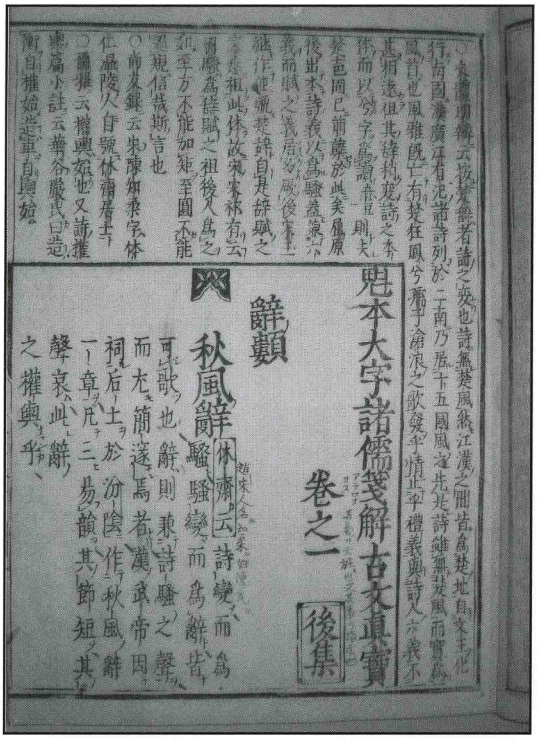
| | |
|---|---|
| 第22回 | 18.10.05 |
| 第23回 | 18.11.09 |
| 第24回 | 18.12.07 |

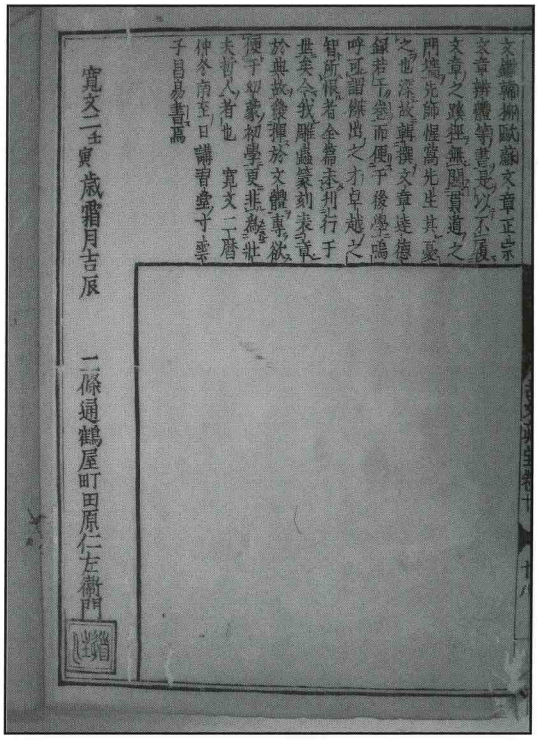
### ■実施委員会

| | |
|---|---|
| 第65回 | 18.09.07 |
| 第66回 | 18.09.28 |
| 第67回 | 18.10.19 |
| 第68回 | 18.11.02 |
| 第69回 | 18.11.09 |
| 第70回 | 18.11.22 |
| 第71回 | 18.11.30 |
| 第72回 | 18.12.21 |

### ■編集委員会

| | |
|---|---|
| 第15回 | 18.10.05 |
| 第16回 | 18.10.26 |
| 第17回 | 18.12.06 |


魁本大字諸儒箋解古文真寶
後集
卷之一
辭類
秋風辭


寛文二壬寅歳霜月吉辰
二條通鶴屋町田原仁左衛門

魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集

寛文2年京都田原仁左衛門刊鼇頭本

## 編集後記

雙松通訊（そうしょうつうじん） 7号をお送りします。平成18年9月、COE中間評価がありました。私どものプログラムは「B」評価で、当然厳しい付帯条項がつけられています。これらを今後の活動にどのように生かしていくか、斬新な視点から検討しなければなりません。

なお、今年度は中間評価以後の活動として、国際シンポジウムを杭州・浙江工商大学で「ブックロードと文化交流」、本学における「実心実学思想と国民文化の交流」と「論語」の開催があり、学外との連携や国際性を重んじた活動に、焦点があてられた観があります。

データベースの運用や、一般市民へのテーマの啓蒙などの課題とあわせて、ポストCOEのあり方をも含めつつ、さらなる展開を模索していくことが必要です。

今後ともご支援ご協力、お願い申し上げます。（T）

『壽』
趙氏摹古印存より


雙松通訊 No.7

**発行日**
平成19年1月31日

**編集・発行**
二松学舎大学 21世紀COEプログラム 実施委員会



〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
TEL：03-3261-3535　FAX：03-3261-3536

e-mail：coejimu@nishogakusha-u.ac.jp
URL：http://www.nishogakusha-coe.net/